博　多　111

—博多遺跡群第152次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第941集

2007

福岡市教育委員会

はか　　た

博　多　111

—博多遺跡群第152次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第941集

遺跡略号　HKT－152

調査番号　0509

2007

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから東アジアとの対外交渉の窓口として発展してきました。このような環境のもとに数多くの埋蔵文化財が残されており、本市におきましてはこの保護と活用に努めているところであります。

本書は博多区綱場町における共同住宅建設に伴い実施した博多遺跡群第152次調査の記録です。調査の結果、中世博多の歴史を知るうえで多くの貴重な資料を得ることができました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財保護のご理解の一助として、また研究資料として役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたりスエヒロ産業株式会社をはじめとする多くの方々のご理解、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成19年３月30日

福 岡 市 教 育 委 員 会
教育長　植木とみ子

例　　言

1．本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、博多区綱場町地内において　実施した博多遺跡群第152次調査の報告書である。
2．本書で報告する各調査の調査番号、遺跡略号は以下のとおりである

調査番号	遺跡略号
０５０９	HKT－152

3．本書に掲載した遺構実測図の作成は中村啓太郎、安藤史郎が行った。
4．本書に掲載した遺物実測図の作成は横溝舞、丸尾弘介、景山貴明、調査担当者が行った。
5．本書に掲載した挿図の製図は調査担当者の他、林由紀子、柴田志乃が行った。
6．本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が行った。
7．本調査に関わる記録、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。
8．本書の執筆は中村が行った。

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
　１．調査に至る経過 …… 1
　２．調査体制 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 9
　１．調査概要 …… 9
　２．第１面 …… 9
　　１）石基礎遺構 …… 9
　　２）井戸 …… 9
　　３）土坑 …… 9
　３．第２面 …… 15
　　１）井戸 …… 15
　　２）土坑 …… 15
　４．第３面 …… 19
　　１）石基礎遺構 …… 19
　　２）井戸 …… 19
　　３）土坑 …… 19
　５．その他の遺物 …… 23
Ⅳ．おわりに …… 26

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 3
第２図　博多遺跡群調査地点図（1/8,000）…… 4
第３図　第152次調査区位置図（1/2,000）…… 5
第４図　第１面遺構配置図（1/100）…… 6
第５図　第２面遺構配置図（1/100）…… 7
第６図　第３面遺構配置図（1/100）…… 8
第７図　SX-35・150実測図（1/40）…… 10
第８図　SE-22実測図（1/40）及び出土遺物実測図（1/3）…… 11
第９図　SK-1・10・13・15・66・152実測図（1/40）…… 12
第10図　SK-12・24・25実測図（1/40）…… 13
第11図　SK-12・24・25・66出土遺物実測図（1/3）…… 14
第12図　SE-99実測図（1/40）…… 16
第13図　SE-99出土遺物実測図（1/3）…… 17
第14図　SK-23・95・100・109・146実測図（1/40）及び出土遺物実測図（1/3）…… 18
第15図　SX-290実測図（1/40）…… 19
第16図　SE-285実測図（1/40）及び出土遺物実測図（1/3）…… 20
第17図　SK-151・169・173・259実測図（1/40）…… 21
第18図　SK-151・169出土遺物実測図（1/3）…… 22
第19図　その他の出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 24
第20図　出土銅銭拓本（1/1）…… 25

図版目次

図版１　（1）第１面全景（南から）　（2）第２面全景（南から）
図版２　（1）第３面東部（南から）
　（2）第３面西部（南から）　（3）第３面中央部（北から）
　（4）SX-35（南から）　（5）SX-150（西から）
図版３　（1）SE-22（東から）　（2）SK-1（東から）
　（3）SK-10（北から）　（4）SK-13（南から）
　（5）SK-15（東から）　（6）SK-66（南から）
　（7）SK-12（北から）　（8）SK-152（北から）
図版４　（1）SE-99（北から）　（2）SK-23（東から）
　（3）SK-95（南から）　（4）SK-100（西から）
　（5）SE-285（南から）　（6）SK151土層（西から）
　（7）SK-173（南から）　（8）板碑出土状況（東から）

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経過

平成16年10月１日、スエヒロ産業株式会社より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課へ共同住宅建設に伴う福岡市博多区綱場町177番５・122番４における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では事業計画地が周知の埋蔵文化財宝蔵地である博多遺跡群に含まれ、事業予定地周囲において発掘調査が行われていることから遺構が存在している可能性が高いと判断した。このため協議を重ねたが、現状での設計変更は不可能との判断から記録保存のための発掘調査を行うこととなった。スエヒロ産業株式会社と福岡市との間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、委託者による条件整備、表土層除去後の平成17年４月18日より調査を開始し、予定期間より３日遅れた７月８日に終了した。

２．調査体制

（2005年度）

調査委託　スエヒロ産業株式会社

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　文化財部長　　山崎純男

　　埋蔵文化財課長　　山口譲治

　　調査第２係長　　池崎譲二

事前審査　事前審査係長　　濱石哲也

　　主任文化財主事　　吉留秀敏

　　事前審査係　　本田浩二郎

調査庶務　文化財整備課管理係　鈴木由喜

調査担当　調査第２係　　中村啓太郎

発掘作業　宮崎雅秀　井上ヨシ子　田中フキ子　光安晶子　田端名穂子　中村幸子　花田則子

　　安藤史郎　阿部純子　崎村雄介　竹原吉秋　永松弘恵　野田トヨ子　花田昌代

　　藤澤義一

（2006年度）

整理作業　有島美江　林由紀子

Ⅱ．位置と環境

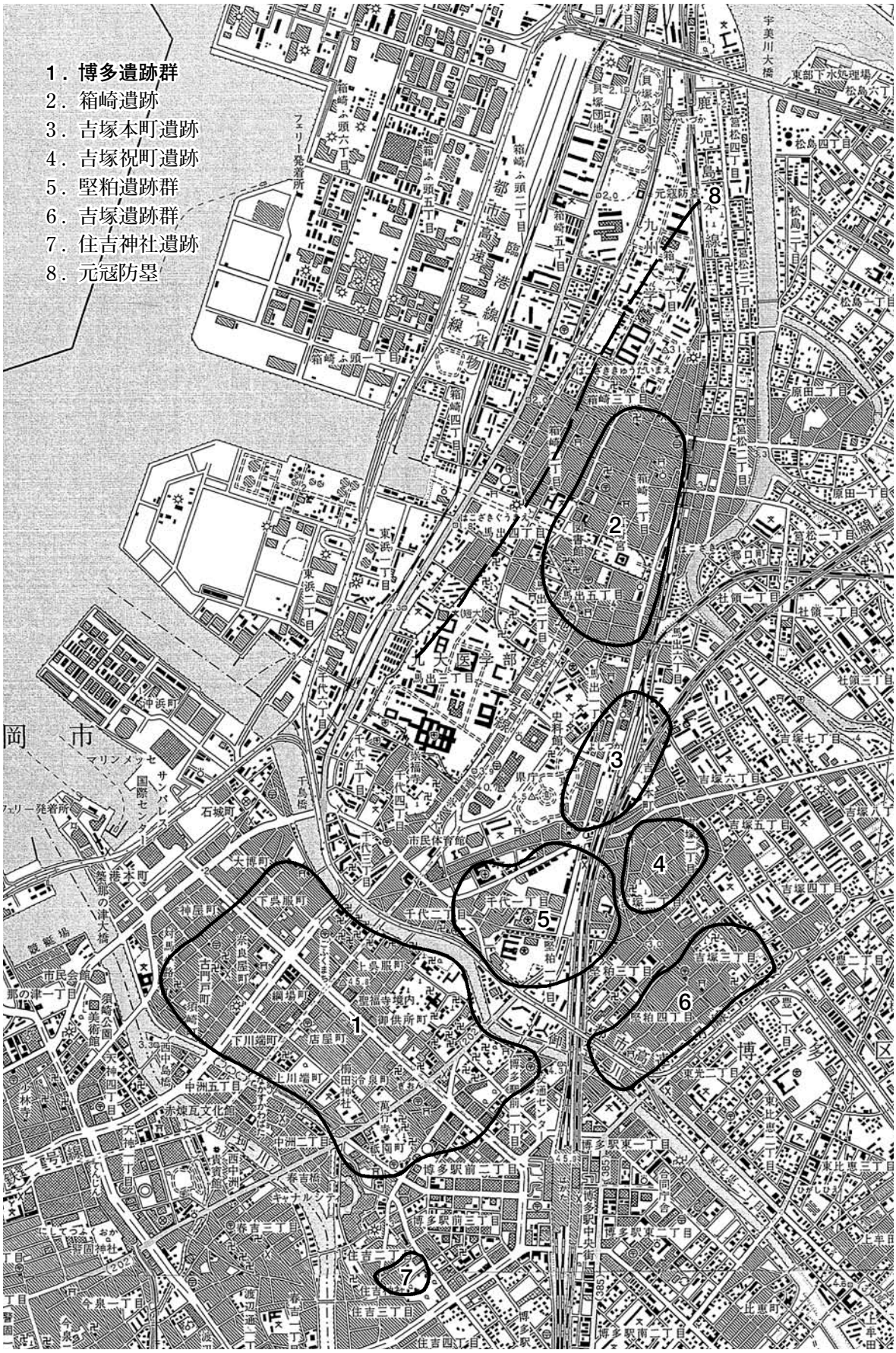
博多遺跡群は博多湾に面して形成された砂丘上に立地している。この砂丘は箱崎砂層と呼ばれ、東区箱崎から早良区百道に至る細長い分布を示しており、その形成時期は縄文時代晩期にはかなりの規模で形成されていたと考えられている。本遺跡群は弥生時代から近世に至る複合遺跡で、東西を石堂川と博多川に挟まれた東西0.8㎞、南北1.5㎞程と推定されている。この範囲は３列の砂丘で形成されており、内陸側から砂丘Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと呼ばれ、砂丘Ⅰ・Ⅱが「博多浜」、Ⅲが「息浜」にあたる。遺跡内の歴史的変遷を概観すると弥生時代には中期の甕棺墓と竪穴住居が確認されている。甕棺墓は砂丘ⅠとⅡとの間の谷頭を巡る形で分布している。後期には砂丘Ⅰの南斜面においても確認されている。古墳時代は砂丘ⅠからⅡの南半かけてみられ、竪穴住居跡、土壙墓、方形周溝墓が検出されており、第28次調査では全長56ｍ以上と推定される前方後円墳が確認されており、福岡平野では大型の部類に入る。古代には遺構は砂丘Ⅰ・Ⅱの全面に広がる。砂丘Ⅰでは区画溝が確認され、砂丘Ⅰ・Ⅱでは帯金具・石帯・須恵器硯・墨書須恵器が出土している。これら遺構、遺物の分布から砂丘Ⅰに官衙施設、Ⅱに律令官人の住居施設が存在したのではないかと考えられている。さらにはこの官衙施設は鴻臚中島館とも推定されている。中世に入ると貿易の中心が鴻臚館から博多へと移り最盛期を迎える。出土する輸入陶磁器類は質、量ともに他を圧倒している。12世紀後半には砂丘Ⅲに開発が進み、14世紀以降は博多の中心は「息浜」に移る。近世初頭には大規模な造成が行われ砂丘ⅡとⅢは完全に埋め立てられ現在に通じる地形となる。

第152次調査は遺跡群の北西部端、所謂「息浜」の西斜面に位置する。

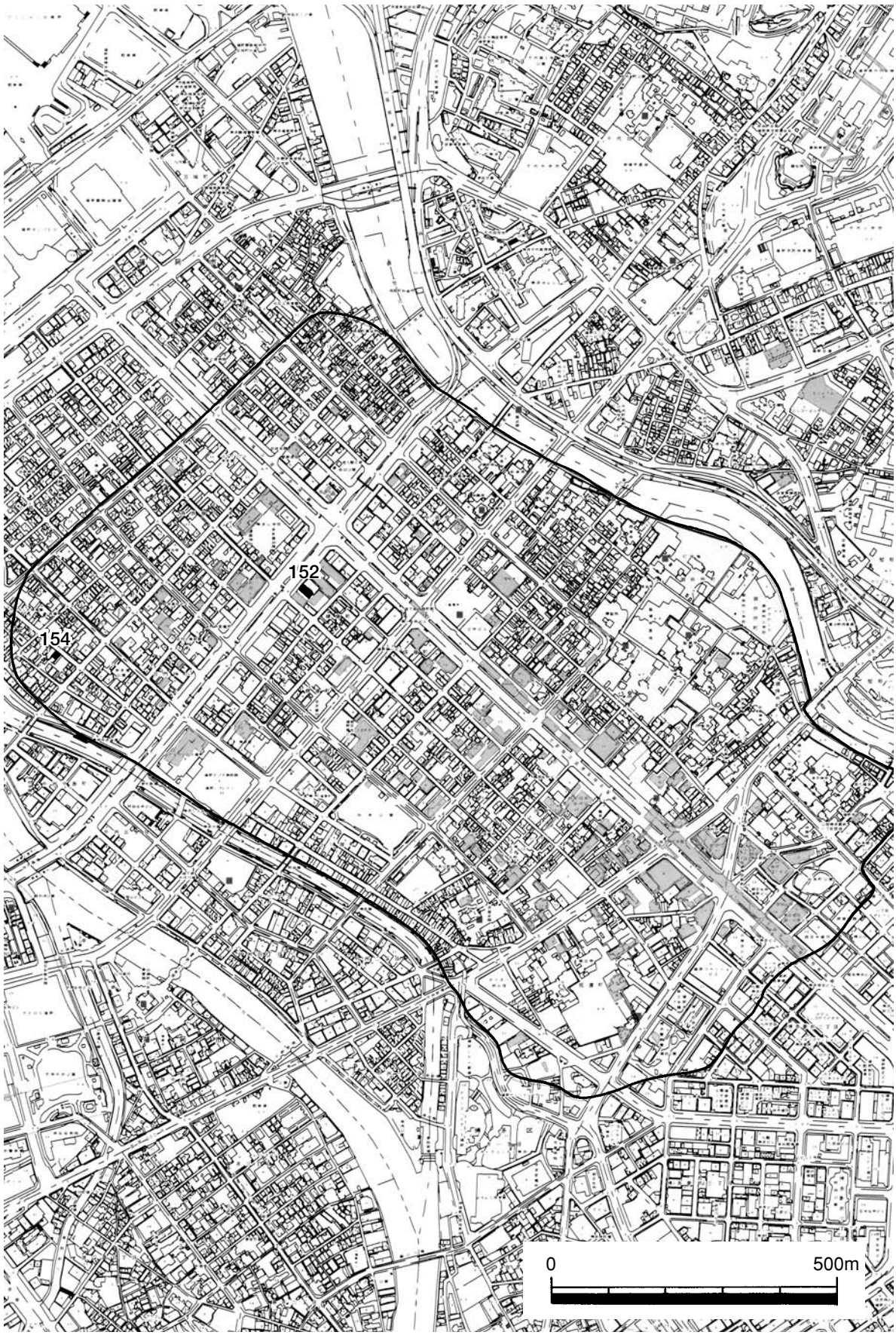
さてこの砂丘には本遺跡群を含め多くの遺跡が立地している。周辺の遺跡をみると東より箱崎遺跡、吉塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群が存在している。箱崎遺跡は弥生時代～近世にかけての遺物、遺構が確認される遺跡である。弥生時代～古墳時代は遺跡の東側を中心に分布し、古墳時代には竪穴住居、方形周溝墓が確認されている。遺跡の中心となるのは筥崎宮が創建された以降の中世で、13世紀以降は西側へ開発が進みほぼ全域に分布する。元寇時と考えられる焼土層、整地層をはじめ多くの遺物、遺構が確認されている。吉塚本町遺跡群は弥生時代～古代にかけての遺物、遺構が確認されている。特に古代は出土する瓦や硯から公的施設の存在が考えられている。吉塚祝町遺跡は道路建設に伴って1996年に確認された遺跡である。遺跡を縦断するように行われた第１次調査では弥生時代から中世に至る各時期の遺構が確認され、弥生時代の甕棺墓、古墳時代の住居址、横穴式石室、石棺墓、土壙墓、古代～中世の集落が検出されており、古代においては越州窯系青磁が多量に出土しており注目されている。中世については13世紀～14世紀前半を中心に栄え、それ以降急速に衰退する。堅粕遺跡群は吉塚本町遺跡群の南に位置し、弥生時代～古代にかけての遺構が確認されている。北側に弥生時代～古墳時代の遺構が集中し、南側に古墳時代後期から古代の遺構が多くみられる。古代においては越州窯系青磁、緑釉陶器、墨書土器等の出土遺物から公的施設が存在する可能性が考えられている。吉塚遺跡群は吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群の南東に位置し、弥生時代～近世に至る遺物、遺構が検出されている。特筆すべき遺物として貨泉の出土が挙げられる。

〈参考文献〉

小林茂他編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会　1998

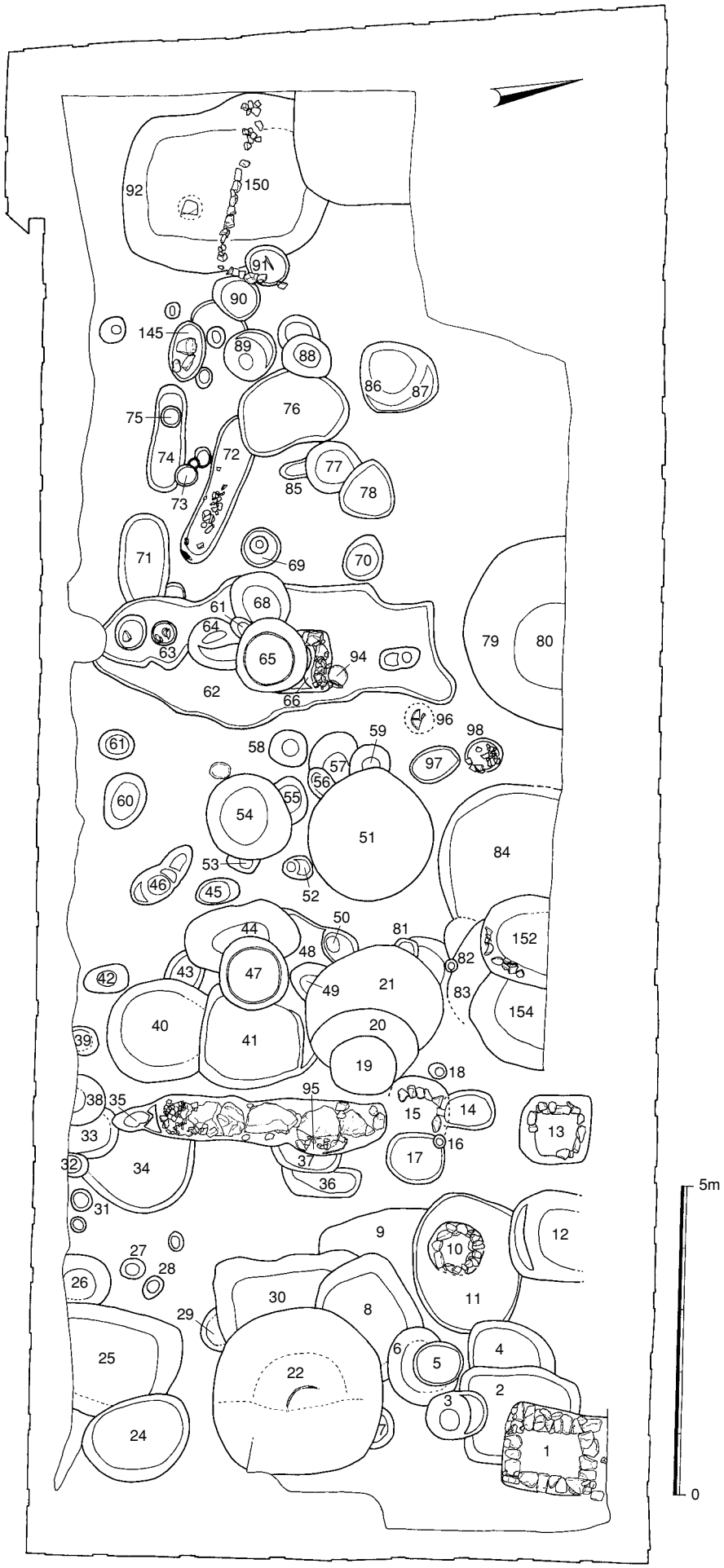


第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

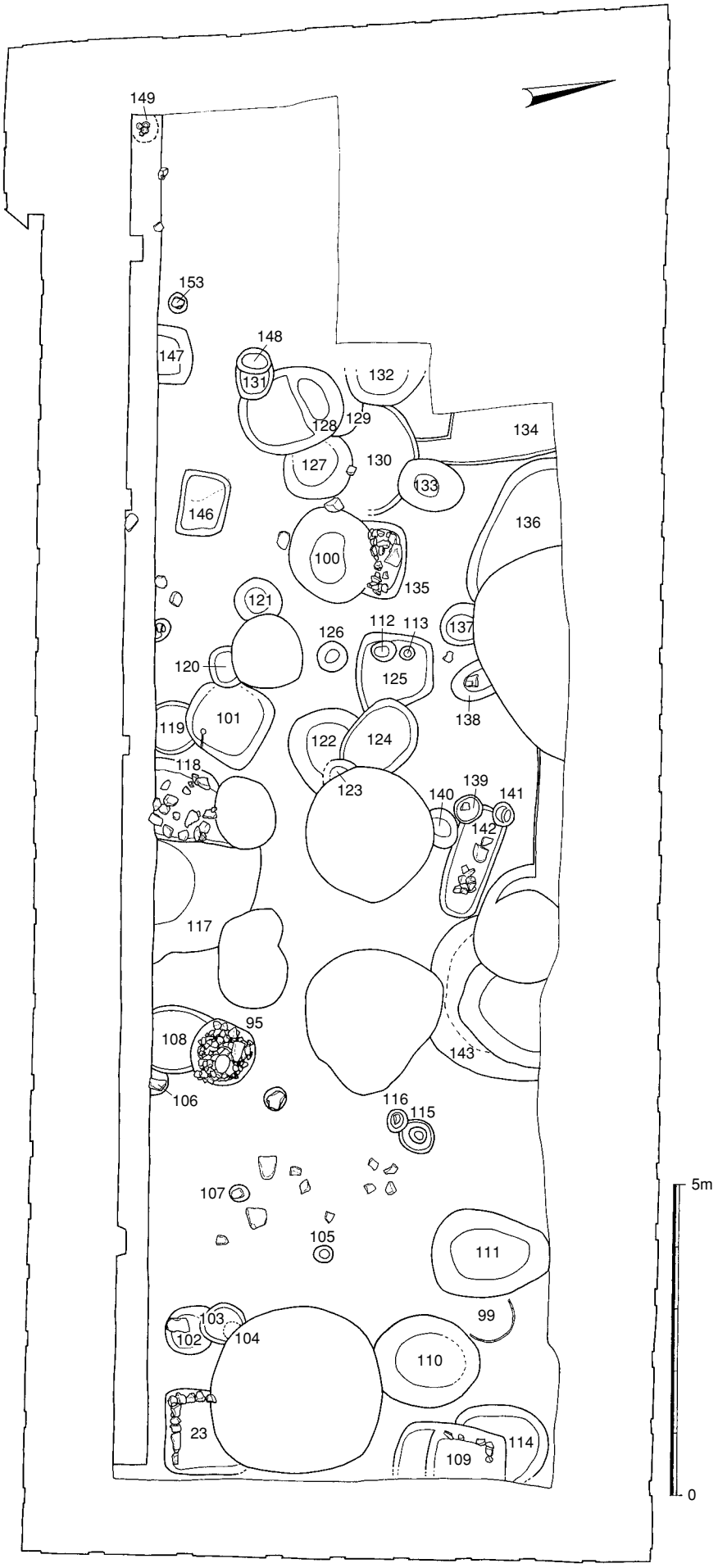


第２図　博多遺跡群調査地点図（1/8,000）

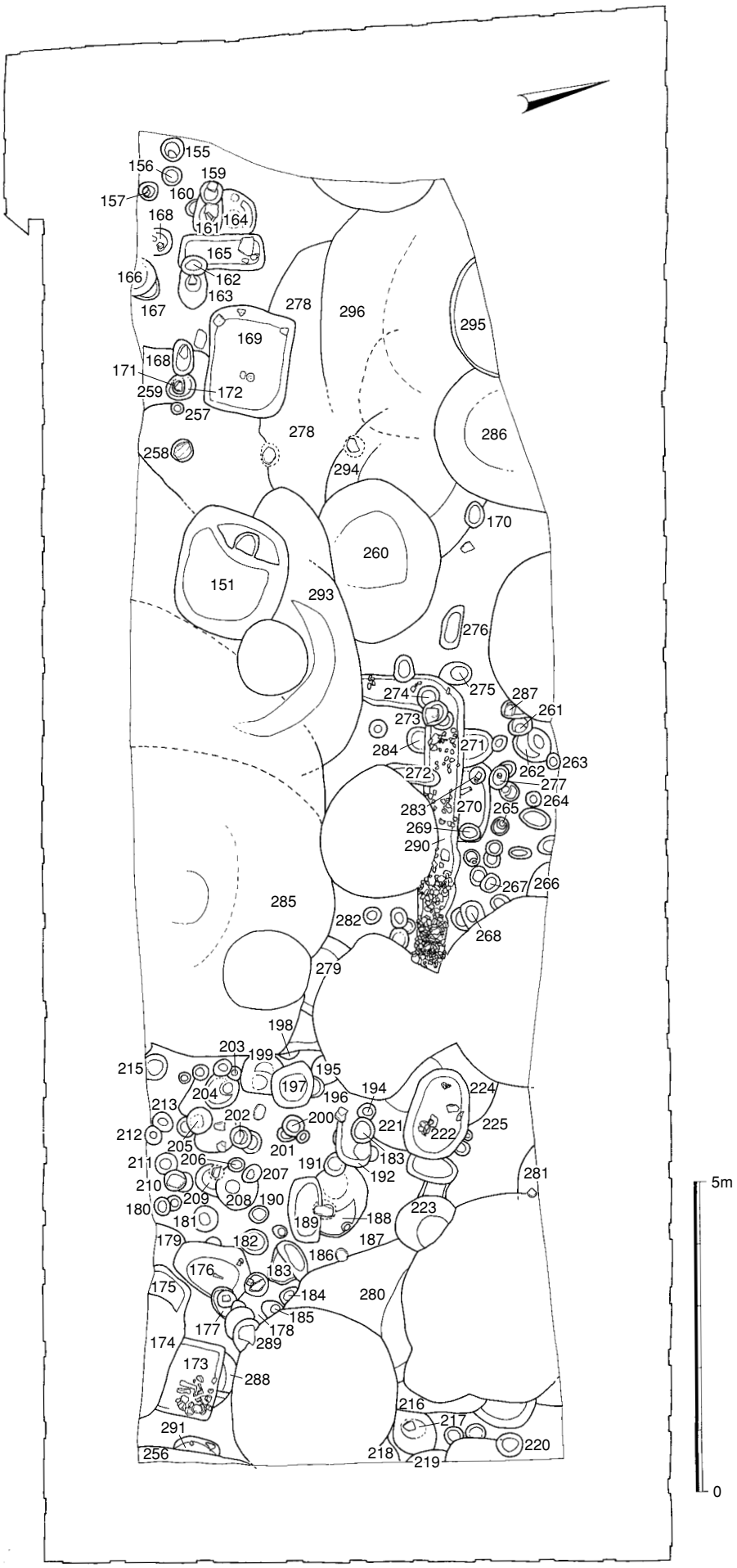
第３図　第152次調査区位置図（1/2,000）



第４図　第１面遺構配置図（1/100）



第５図　第２面遺構配置図（1/100）



第６図　第３面遺構配置図（1/100）

Ⅲ．調査の記録

１．調査概要

第152次調査区は遺跡の北部、所謂「息浜」の南斜面に位置する。現況で標高5.5ｍを測る。

調査は事業者による矢板設置及び表土搬出時の立会から開始した。遺構面の深さを確認しながら掘削土を場外に搬出し、並行して矢板を設置した。掘削が進むと試掘で想定された遺構面より上層で石基礎遺構を確認したためそこで重機による掘削を終了し、安全対策及びベルトコンベア設置のため矢板周囲の土を残し人力による検出作業を開始した。調査面積は実質150㎡程度である。遺構面は現地表より約1.5ｍ下げた標高４ｍ前後で第１面とした。第１面は暗褐色土をベースとし、これに炭化物粒が混じる。第２面は１面より30～50㎝下げたところで設定した。暗褐色砂質土をベースとするが西側では分かり難い。第３面は地山である黄褐色砂となる。標高３ｍ前後を測る。

２．第１面

第１面は重機による掘削作業中、石基礎遺構SX-35が確認されたため、予定より上層で止め調査を行った。検出遺構は石基礎遺構、井戸、石組土坑、土坑等である。

１）石基礎遺構

SX-35（第７図）

調査区東部に位置する。長さ470㎝、幅80㎝前後、深さ55㎝を測る。30～80㎝大の扁平な玄武岩を敷き、間に小礫、瓦等を詰めている。

SX-150（第７図）

調査区西端に位置する。東西290㎝、南北120㎝を測る。10～20㎝大の石材を配置する。調査時には石を残し下げたため、堆積状況が解らないが、石材外側が面を成していることから基壇状であった可能性が考えられる。

２）井戸

SE-22（第８図）

調査区東端に位置する。掘り方は円形を呈し、壁は比較的鋭角に立つ。径2.7～2.8ｍ、深さ3.3ｍ以上を測る。井筒は瓦組で最下部の１段のみ遺存する。径70㎝程度か。湧水と安全面から完掘していない。

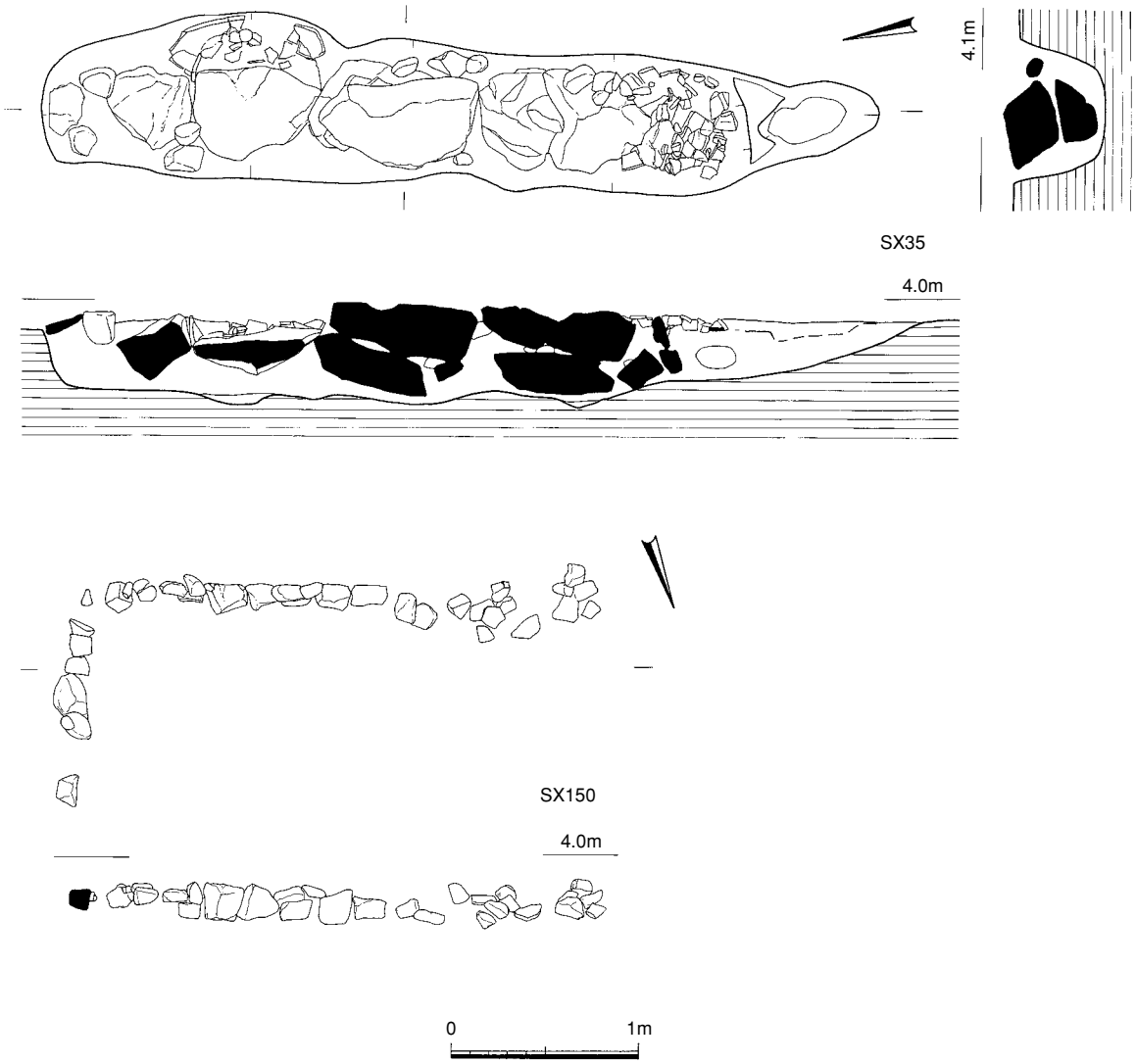
出土遺物（第８図）１・２は明代染付の皿。２は漳州窯系。３は肥前系染付の小瓶。器高12.5㎝を測る。４は灰青陶器碗。高台部に砂目が付着する。

３）土坑

SK-1（第９図）

調査区東に位置する石組土坑である。平面形は長方形を呈し、掘り方は長さ170㎝、幅140㎝、深さ30㎝、内法で長さ100㎝、幅70㎝を測る。10～30㎝大の石材を配置し、西側で２段程遺存する。

遺物は底部糸切りの土師器小皿、坏、肥前系染付等が出土している。



第７図　SX-35・150実測図（1/40）

SK-10（第９図）

調査区東に位置する石組土坑である。平面形は円形を呈し、掘り方は径90㎝、深さ25㎝、内法で径60㎝を測る。10～30㎝大の石材を配置し、２段程遺存する。

遺物は土師器小皿、坏、瓦質火鉢、肥前系染付等が出土している。

SK-13（第９図）

調査区東に位置する石組土坑である。平面形は方形を呈し、掘り方は一辺110㎝、深さ20㎝、内法で60㎝を測る。10～30㎝大の石材を配置し、南東部は一部石材が遺存しない。

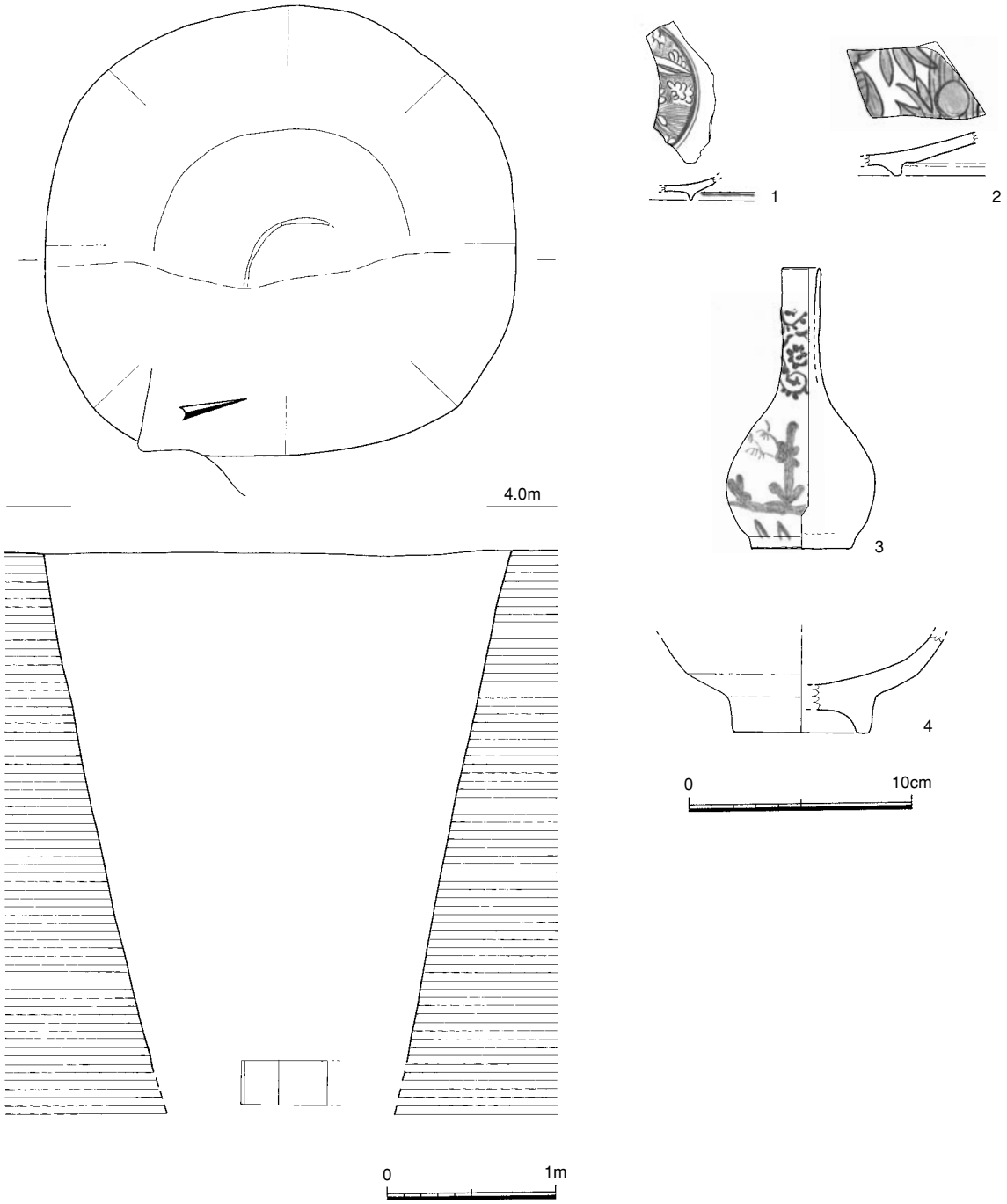
遺物は土師器小皿、坏、瓦、肥前系染付、陶器等が出土している。

SK-15（第９図）

調査区東に位置する石組土坑である。南側をSX-35に切られる。平面形は円形か。掘り方は径110前後、深さ15㎝、内法で径60㎝程度か。20㎝大の扁平な石材を配置し、遺物は土師器小皿、坏、瓦、鉄製品等が出土している。

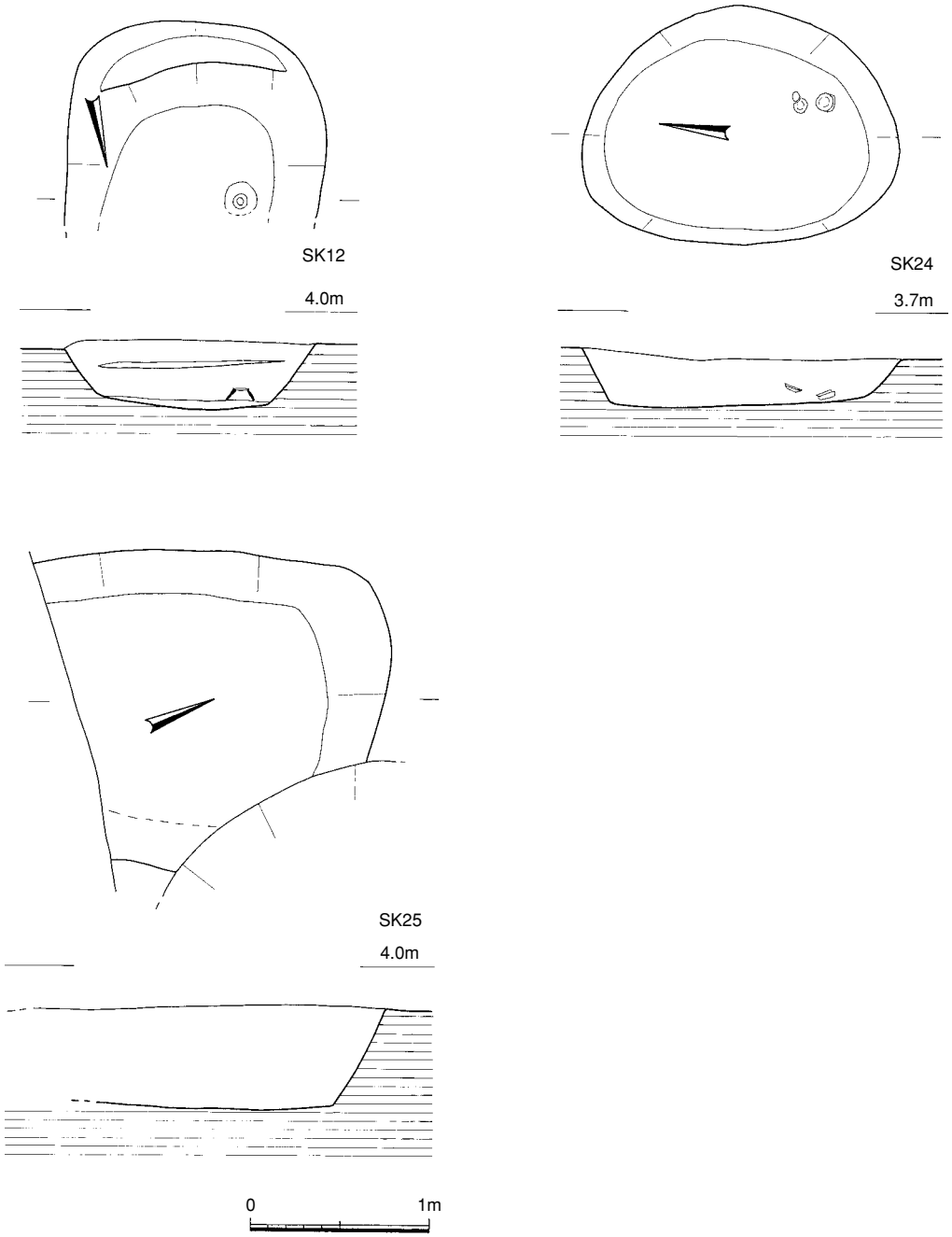
SK-66（第９図）

調査区中央に位置する石組土坑である。南側を切られる。平面形は方形か。掘り方東西100㎝、深さ30㎝を測る。10～30㎝大の石材を配置する。



第８図　SE-22実測図（1/40）及び出土遺物実測図（1/3）

第９図　SK-1・10・13・15・66・152実測図（1/40）



第10図　SK-12・24・25実測図（1/40）

遺物は土師器小皿、坏、瓦、獣骨等が出土している。

出土遺物（第11図）27は明代染付の碗。外面は青磁釉。

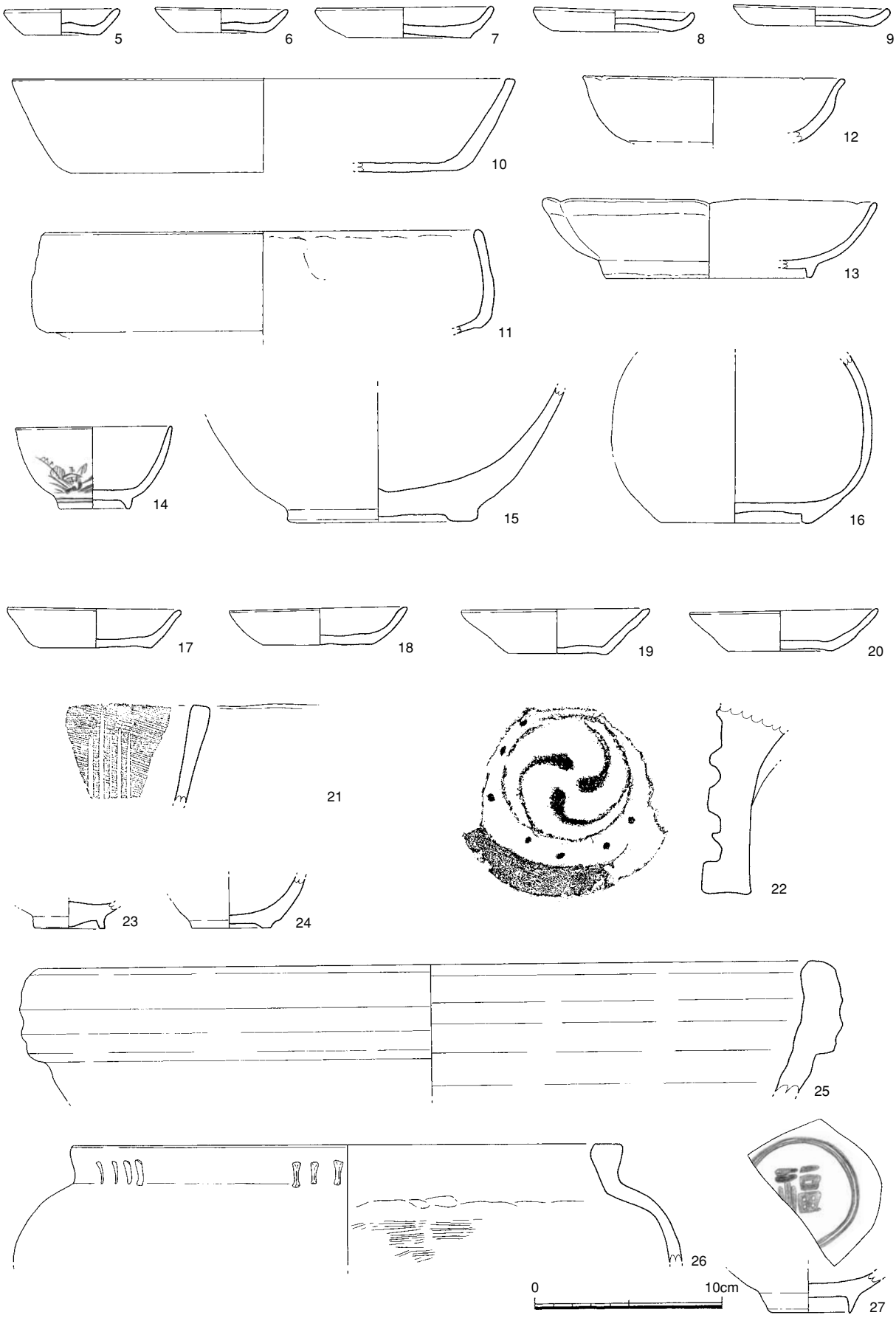
SK-152（第９図）

調査区中央北側に位置する。中段に石が並ぶが配置したものか明らかではない。平面形は円形か。掘り方は東西140㎝、深さ110㎝を測る。

遺物は土師器小皿、坏、白磁、肥前系染付、瓦が出土している。

SK-12（第10図）

調査区東に位置し北側は調査区外に延びる。南側にテラスを有し、幅140㎝、深さ40㎝を測る。



第11図　SK-12・24・25・66出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第11図） 5 ～ 9 は底部糸切りの土師器小皿。口径6.2～9.4㎝、器高1.0～1.7㎝を測る。10・11は土師質の浅鉢。12・13は肥前系青磁の輪花皿。復元口径14.0・17.8㎝を測る。14は肥前系染付の碗。15・16は陶器の壺。

SK-24（第10図）

調査区東に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ180㎝、幅130㎝、深さ35㎝を測る。

出土遺物（第11図）17～20は底部糸切りの土師器坏。口径9.2～10.0㎝、器高2.0～2.3㎝を測る。21は土師質の擂鉢。22は三巴文の軒丸瓦で浅黄色を呈する。

SK-25（第10図）

調査区東部に位置し南側は調査区外に延びる。平面形は長方形か。深さ55㎝を測る。

出土遺物（第11図）23は龍泉窯系青磁碗。24は瓦質の小碗か。25は備前焼の甕。26は瓦質の火鉢。復元口径28.9㎝を測る。

３．第２面

第１面より30～50㎝下げた暗褐色砂質土をベースとして第２面を設定した。南側にトレンチを設定し土層を確認しながら検出作業を行ったが、西側では堆積状況が明確ではなく分かり難い。検出遺構は井戸、土坑、柱穴である。

１）井戸

SE-99（第12図）

調査区東部に位置する。掘り方は円形で壁はやや緩い。東西3.4ｍ、深さ3.2ｍ以上を測る。井筒は瓦組で西側の遺存状況は悪い。径80㎝を測る。最下部は径80㎝の桶を据える。湧水のため完掘していない。

出土遺物（第13図）28～33は底部糸切りの土師器小皿。口径7.1～8.4㎝、器高1.2～1.9㎝を測る。34は近世陶器の碗。口径13.6㎝、器高6.3㎝を測る。35は明代漳州窯系染付の大皿。36は唐津擂鉢。復元口径29.6㎝、器高11.5㎝を測る。擂目は７条単位。釉は赤黒色を呈する。

２）土坑

SK-23（第14図）

調査区東部に位置する石組土坑である。SE-22にきられる。平面形は方形を呈する。東西140㎝、深さ50㎝を測る。10～30㎝大の石材を配置し、東部は一部石材が遺存しない。

遺物は底部糸切りの土師器、白磁、龍泉窯系青磁、明代染付、瓦質火鉢、擂鉢、獣骨等が出土している。

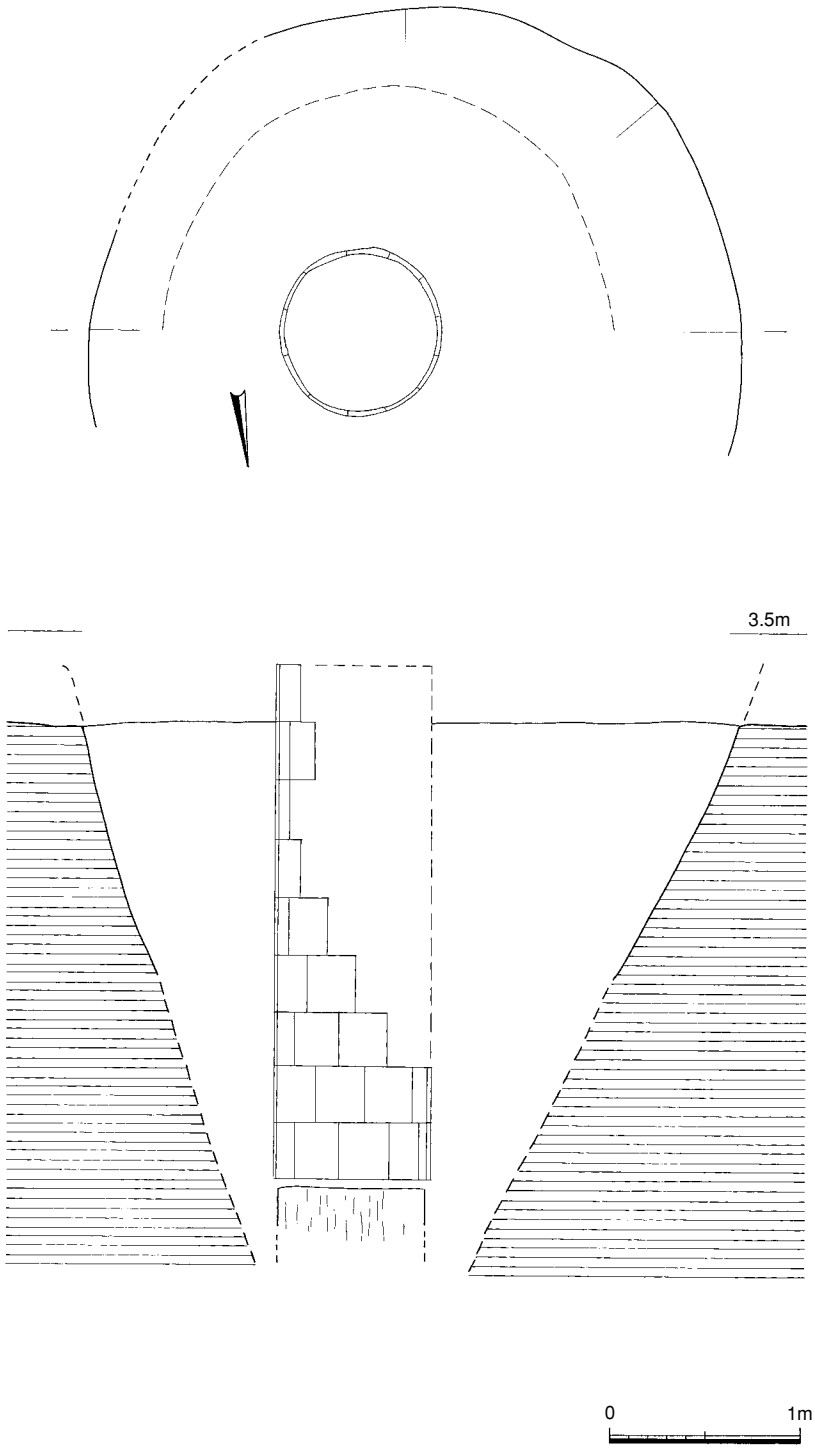
SK-95（第14図）

調査区中央南側に位置する。円形を呈し、10～30㎝の石材を一面に配する。東西100㎝、深さ45㎝を測る。

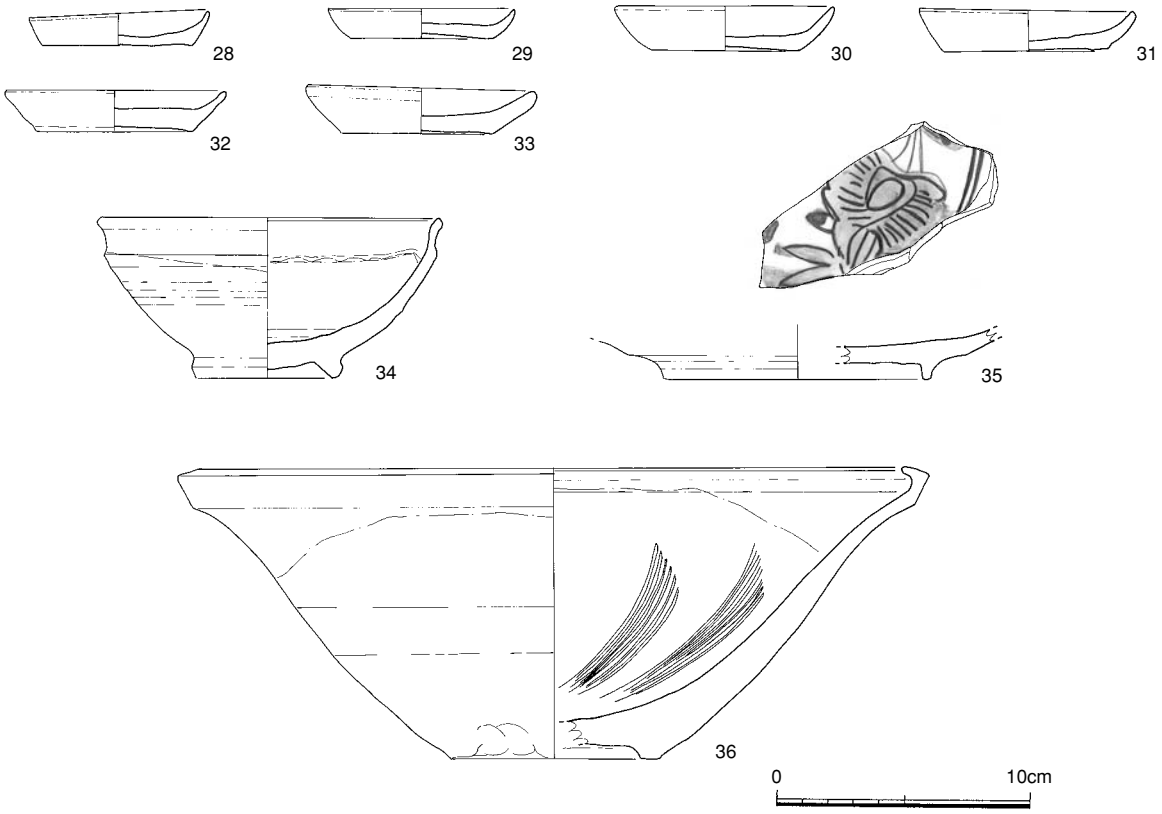
遺物は底部糸切りの土師器、染付、陶器等が出土している。

SK-109（第14図）

調査区東端に位置する。東側は調査区外に延びる。西側に石が並ぶが配置したものか明らかではない。平面形は長方形か。南側にテラスが付く。



第12図　SE-99実測図（1/40）



第13図　SE-99出土遺物実測図（1/3）

遺物は底部糸切りの土師器、白磁、龍泉窯系青磁、中国陶器、瓦質擂鉢、備前焼擂鉢、甕等が出土している。

SK-100（第14図）

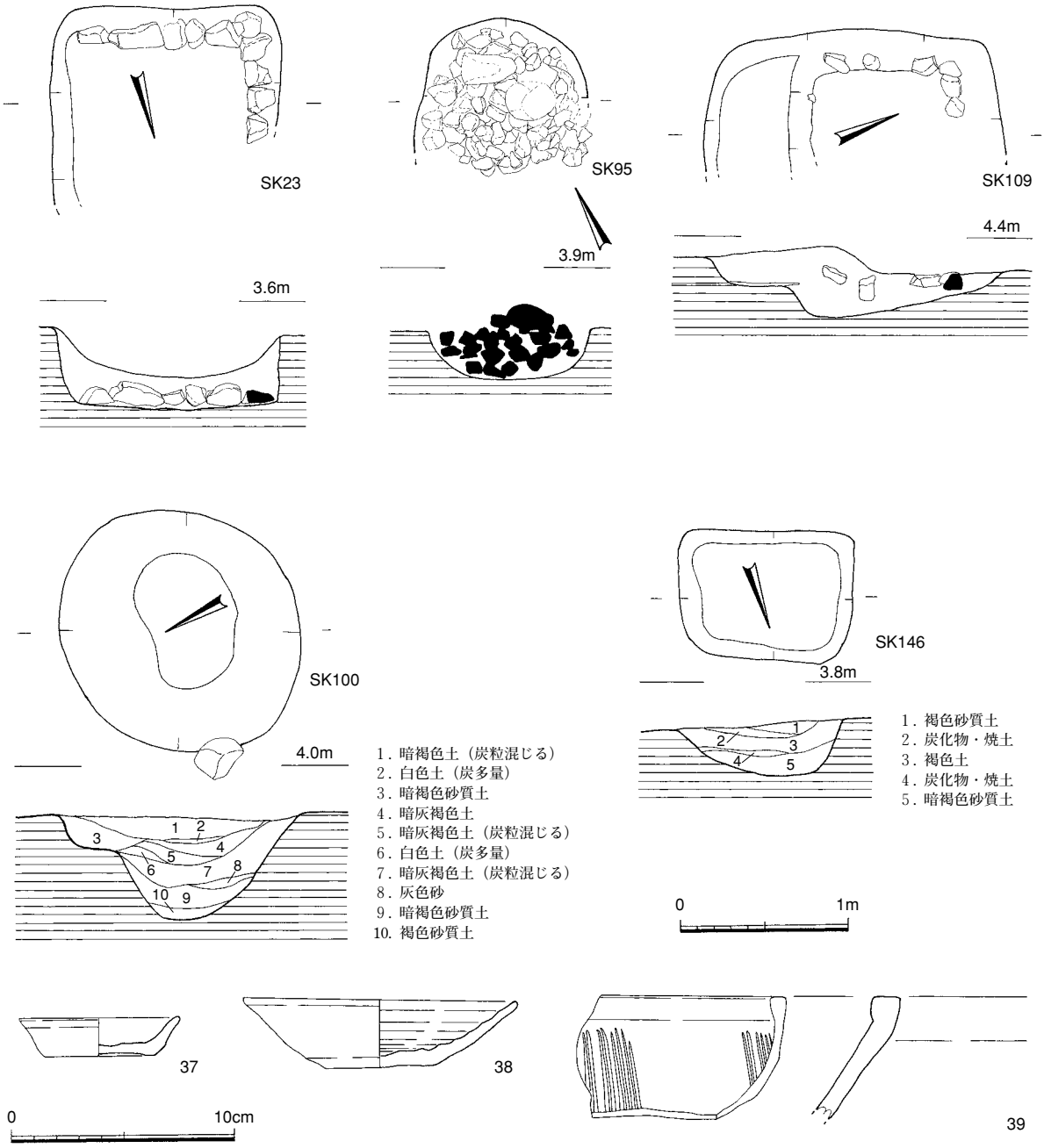
調査区西に位置する。平面形は円形で径140㎝前後、深さ60㎝を測る。覆土に炭化物、灰が混じる。

出土遺物（第14図）37は底部糸切りの土師器小皿。口径7.2㎝、器高1.7㎝を測る。38は大内系土師器坏。口径12.3㎝、器高3.1㎝を測る。39は瓦質の擂鉢。

SK-146（第14図）

調査区調査区西に位置する。平面形は長方形で長さ105㎝、幅80㎝を測る。覆土に炭化物、焼土が堆積する。

遺物は底部糸切りの土師器、染付、備前擂鉢、瓦等が出土している。



第14図　SK-23・95・100・109・146実測図（1/40）及び出土遺物実測図（1/3）

４．第３面

第３面は地山面である黄褐色砂で確認した。検出遺構は石基礎遺構、井戸、土坑、柱穴である。井戸は調査区中央から西部、柱穴は調査区中央から東部にかけて分布する。

１）石基礎遺構

SX-290（第15図）

調査区中央に位置する。現状で東西470㎝、南北170㎝、幅60㎝、深さ20㎝を測る。断面がＵ字形の溝状を呈し、10～20㎝大の石材を詰めるが西側は疎らである。

遺物は底部糸切りの土師器皿・坏、龍泉窯系青磁、白磁、瓦質火鉢、備前焼の壺、鉄製品等が出土している。

２）井戸

井戸は調査区中央から西部にかけて集中するが切り合いが著しく掘り方を確定できたものは少ない。

SE-285（第16図）

調査区中央南側に位置する。南側は調査区外に延びる。掘り方は円形とおもわれるが、西側は確定できない。井筒は径80㎝程度の桶か。標高0.4ｍで湧水したため完掘していない。

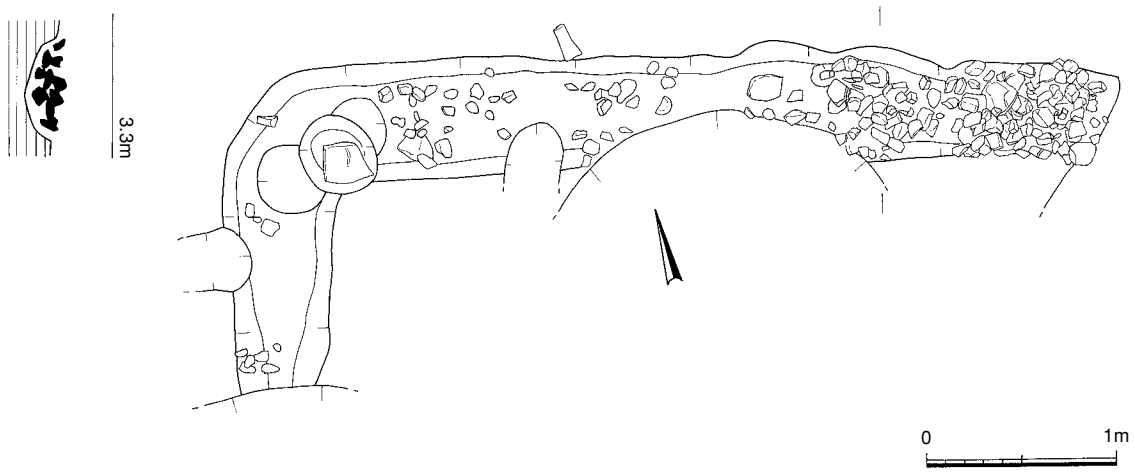
出土遺物（第16図）40・41は土師器小皿。口径7.1・9.4㎝、器高1.4㎝を測る。いずれも底部は回転糸切りで41は板状圧痕を有する。42は須恵質の碗。復元口径16.4㎝,器高6.9㎝を測る。底部は回転糸切り。43は朝鮮象嵌青磁碗。

３）土坑

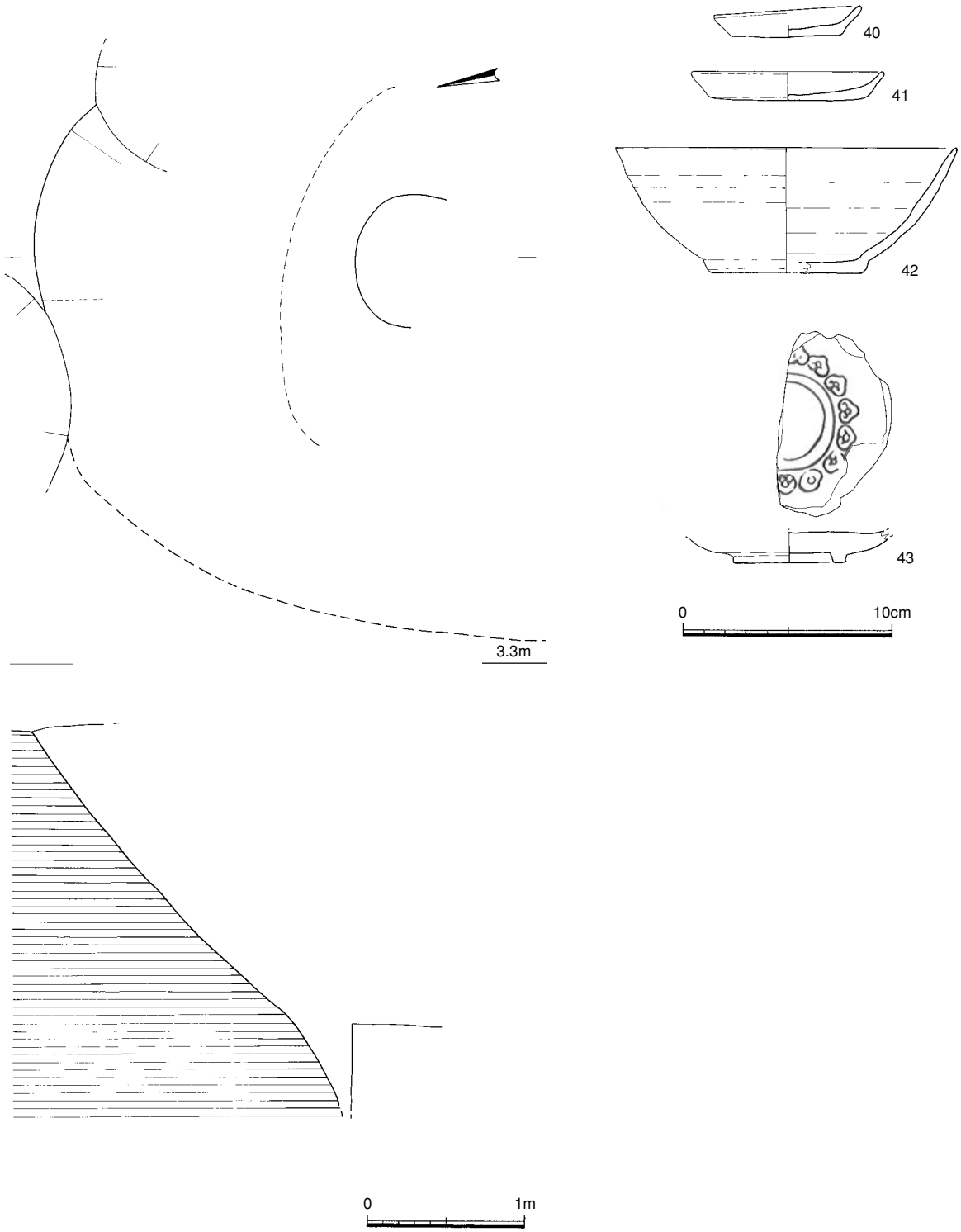
SK-151（第17図）

調査区西に位置し、井戸群を切る。平面形は方形を呈し、西側にテラスを有する。東西198㎝、南北180㎝、深さ90㎝を測る。覆土に炭化物、灰が堆積する。

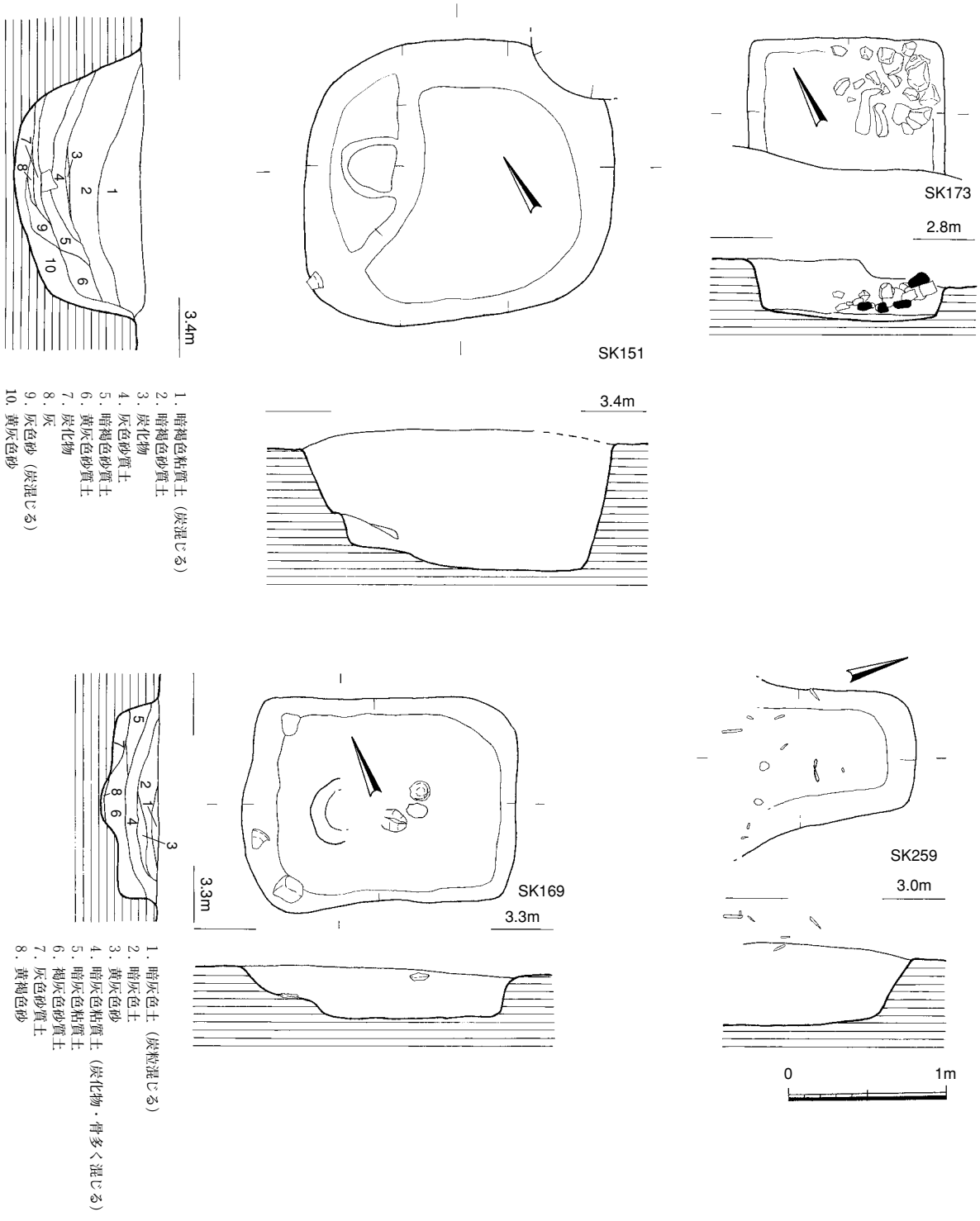
出土遺物（第18図）44～50は底部糸切りの土師器小皿。51～54は大内系土師器坏。口径。12.4～



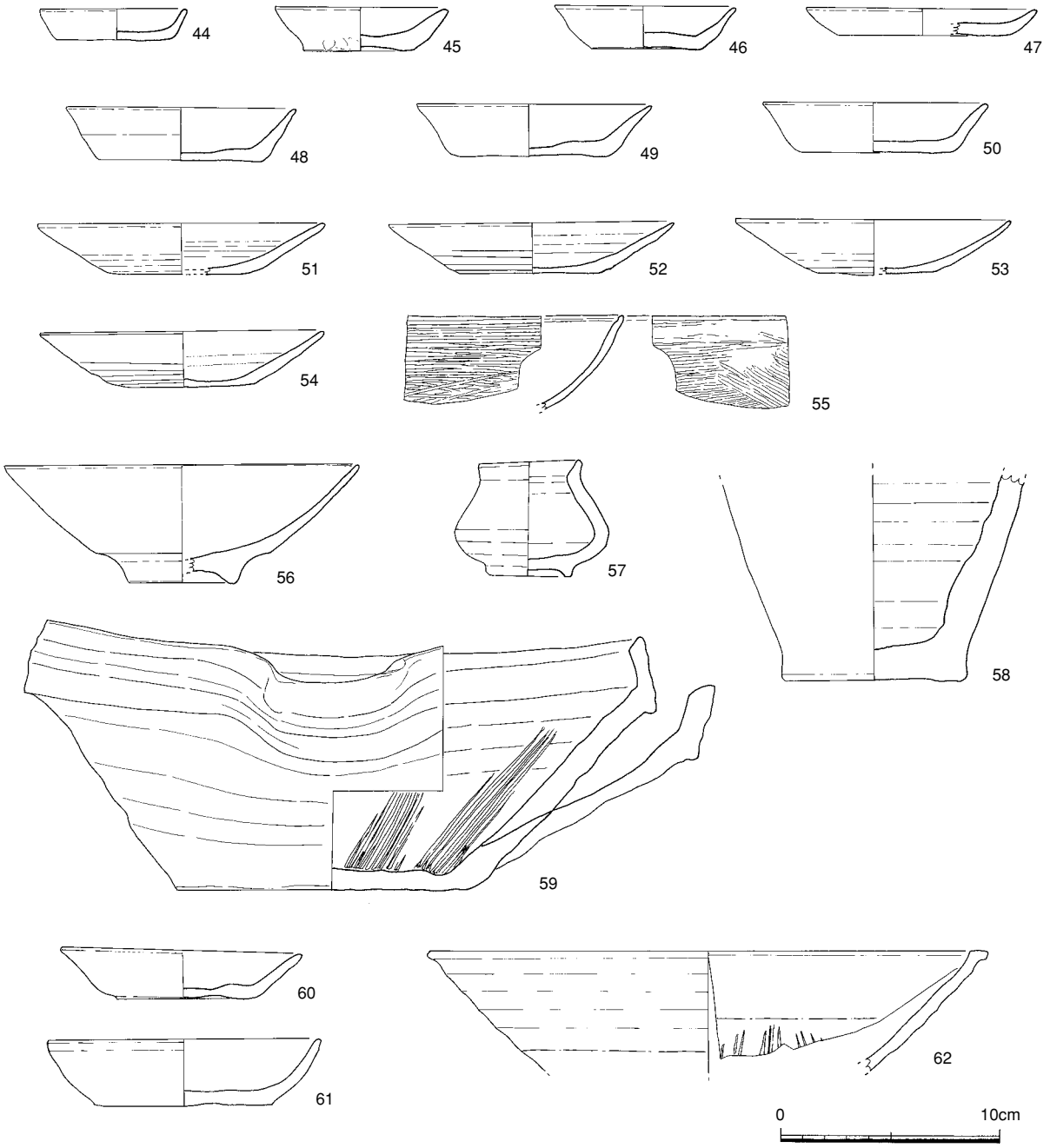
第15図　SX-290実測図（1/40）



第16図　SE-285実測図（1/40）及び出土遺物実測図（1/3）



第17図　SK-151・169・173・259実測図（1/40）



第18図　SK-151・169出土遺物実測図（1/3）

13.0㎝、器高2.3～2.5㎝を測る。55は楠葉型瓦器椀。内外面とも細かいミガキを密に施す。56は朝鮮軟質白磁碗。口径16.0㎝、器高5.3㎝を測る。内外底に目跡を有する。57は朝鮮白磁小壺。口径4.7㎝、器高5.3㎝を測る。58は陶器の瓶。59は備前擂鉢。口径27.0㎝、器高12.4㎝を測る。７条単位の擂目を有する。

SK-169（第17図）

調査区西に位置する。平面形は長方形を呈し、床面に小穴が付く。長さ175㎝、幅130㎝、深さ30㎝を測る。覆土に炭化物、獣骨が混じる。

出土遺物（第18図）60・61は土師器坏。口径10.8・12.4㎝、器高2.3・3.0㎝を測る。底部は回転糸切りで60は板状圧痕を有する。62は古瀬戸擂鉢。復元口径25.6㎝を測る。釉はオリーブ灰色を呈する。

SK-173（第17図）

調査区東端に位置する。東西128㎝、深さ40㎝を測る。北東隅に石が集中する。

遺物は底部糸切りの土師器、朝鮮雑釉陶器碗、瓦質の鉢、擂鉢、火鉢、銅銭、鉄滓、獣骨等が出土している。

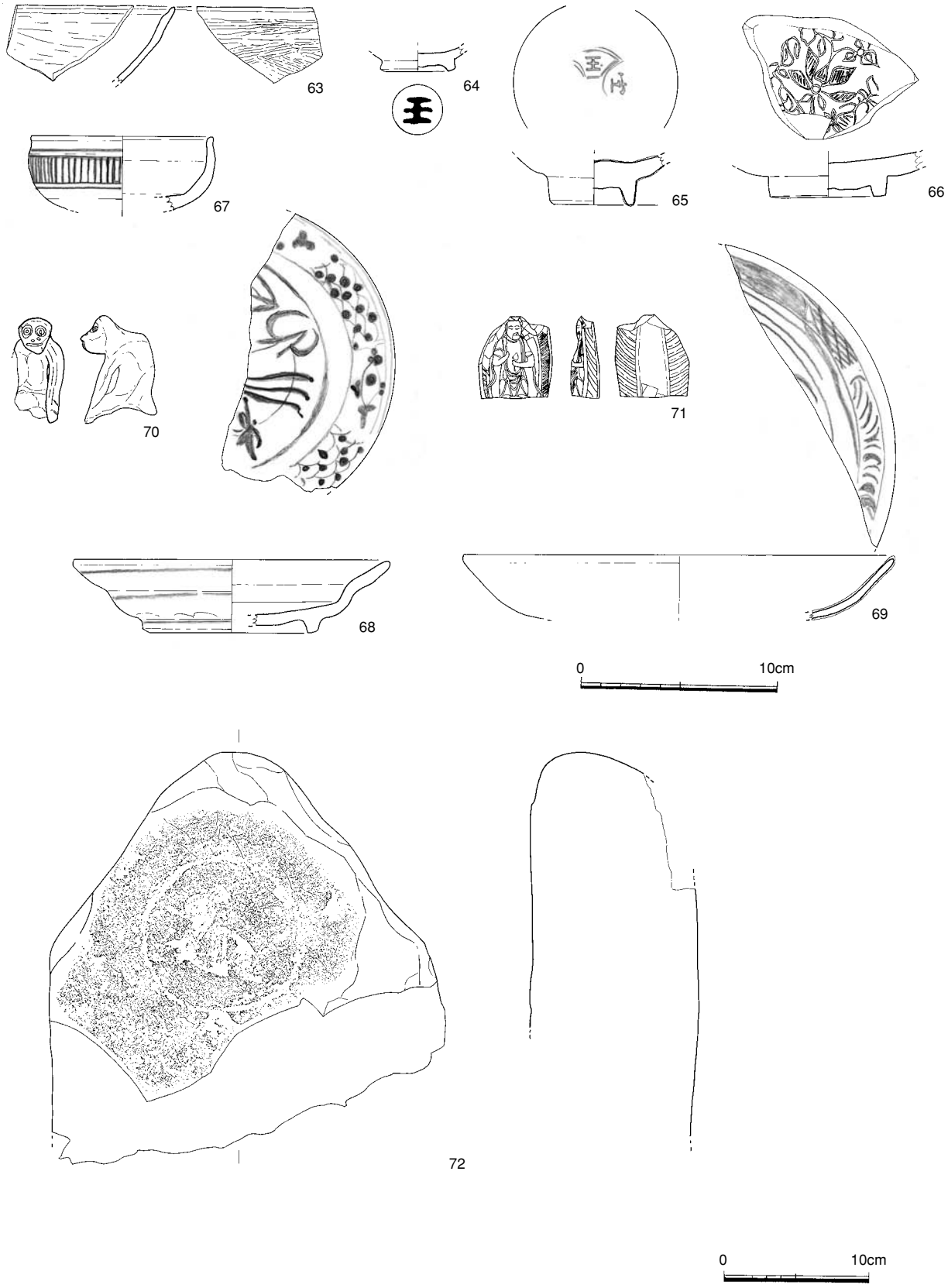
SK-259（第17図）

調査区西に位置する。南側は調査区外に延びる。平面形は長方形か。幅85～100㎝、深さ50㎝を測る。上層には炭化物、灰が堆積していた。

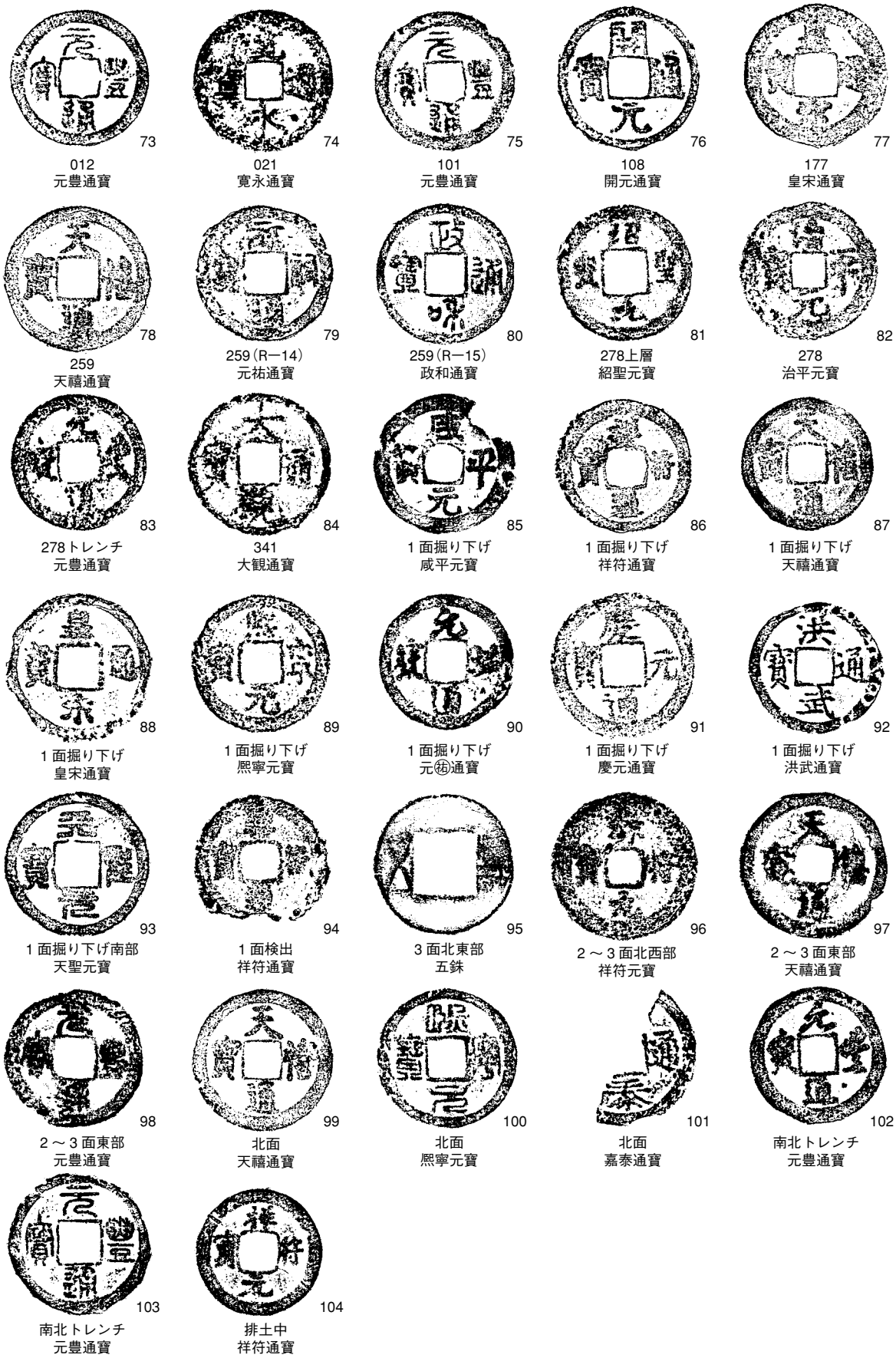
遺物は龍泉窯系青磁碗の小片、陶器、底部糸切りの土師器等が出土している。また釘が多数出土しており木棺墓の可能性も考えられる。

５．その他の遺物

63はSE-65出土の楠葉型瓦器椀。外面は密に、内面は疎にミガキを施す。64は明代白磁抉高台皿。外底部に「王」の墨書を有する。65は龍泉窯系青磁碗。内底にスタンプ文を有する。66は白磁碗。67は粉青沙器の皿か。復元口径9.3㎝を測る。釉はオリーブ灰色を呈する。68は明代漳州窯系染付皿。69は明代赤絵皿。70は土製の猿で暗灰色を呈する。71は土製の仏像。72はSP289出土の板碑。柱穴の根石に使用されていた。石材は玄武岩で頂部のみ遺存する。73～104は各遺構出土の銅銭。出土状況は多くは遺構や包含層から単独で出土するが、数枚～４㎝程度重なった緡銭状のものもみられる。本調査においては総数で93枚（小片含む）出土したが判読可能な32枚を掲載した。



第19図　その他の出土遺物実測図（1/3・1/4）



第20図　出土銅銭拓本（1/1）

Ⅳ．おわりに

第152次調査は３面の調査を行った。検出した遺構は第１面は石基礎遺構、井戸、石組土坑、土坑、第２面は井戸、石組土坑、土坑、柱穴、第３面は石基礎遺構、井戸、土坑、柱穴である。この面での遺構密度が高いのは上層で検出できなかった遺構を含むためである。時期は第１面が近世後半、第２面が近世前半、第３面が中世後半～近世初頭と考えられる。

石基礎遺構は第１面、第３面で３基確認した。SX-35は近世後半～末に位置付けられ、配された石材の大きさが特徴的である。SX-150は内側に粘土等の整地は確認できなかったが、第42次調査の311・312号遺構に形態が類似しており、基壇状遺構の可能性がある。時期は遺物が未確認であるが、検出面から近世と考えられる。SX-290は第42・60次調査等に類例があり、時期は検出面と遺物から16世紀代であろう。

石組土坑は第１・２面で８基確認したが大半は第１面検出で時期は近世である。規模、形態等、周囲の状況と同様である。削平のためか深いものはみられない。

井戸は各面で確認された。第１面のSE-22は掘り方が狭い瓦組、２面のSE-99は掘り方が広い瓦組。第３面は中央から西にかけて分布する。切り合いが著しく調査区外に拡がることから掘り方が確定できたものは少ない。また３面検出で井筒の痕跡が確認できたのはSE285の１基で桶である。他の井戸も同様であろう。

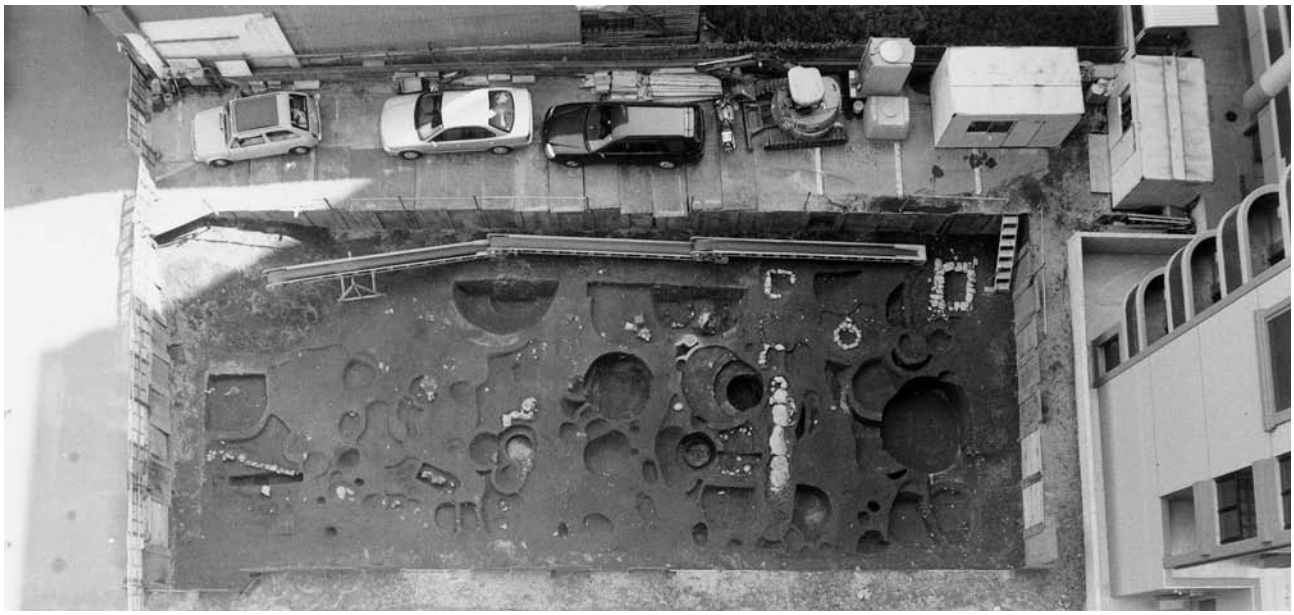
柱穴は主として第３面の中央から東にかけて集中して確認された。根石を有するものがみられるが現時点で建物等は復元できていない。

第42・60次調査で確認されている焼土層については今回の調査では２面以下の堆積層に炭化物は混じるものの明確な層は存在しないが、２面以下の遺構、SK-100・151・169等には焼土、炭化物、灰が堆積するものがみられる。これらの時期は15世紀後半～16世紀代であり、第42・60次調査の焼土層の時期に対応するものである。

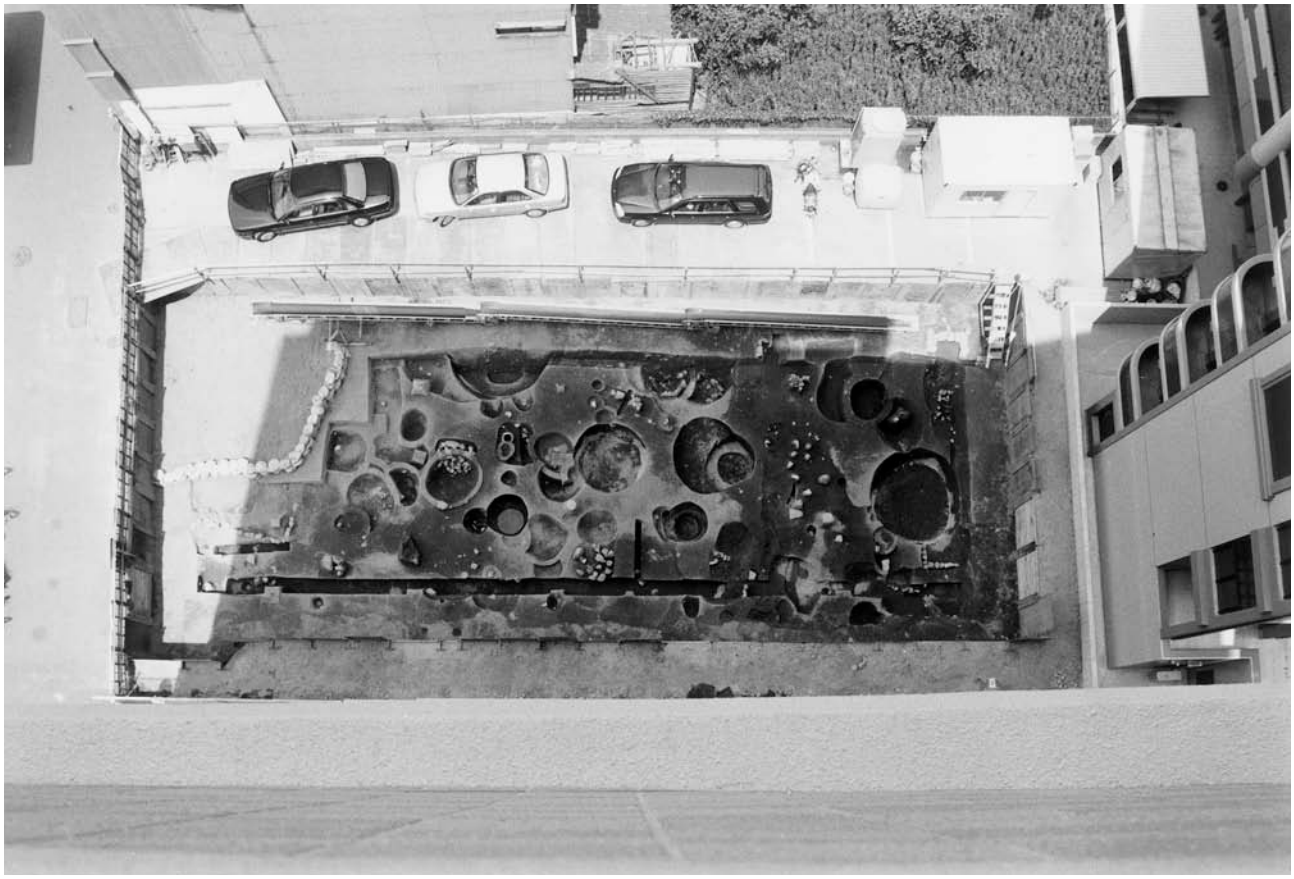
また今回、分類、分析は行えなかったが、周辺調査同様、各層から魚・獣骨が出土している。周辺調査の分析では、食物残滓の他、骨角器材料としての獣骨が確認されている。今後、本調査出土獣骨も機会を捉えて分析を行いたい。

中世前半期については遺物はみられるが遺構はSK-259や柱穴等にその可能性が有るものの明確なものは確認できていない。

図　　版



(1) 第 1 面全景（南から）



(2) 第 2 面全景（南から）

図版 2

（1）第 3 面東部（南から）

（2）第 3 面西部（南から）

（3）第 3 面中央部（北から）

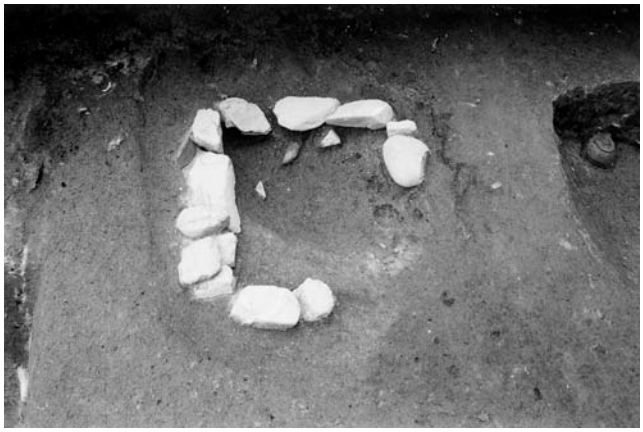
（4）SX-35（南から）

（5）SX-150（西から）

（1）SE-22（東から）

（2）SK-1（東から）

（3）SK-10（北から）



（4）SK-13（南から）

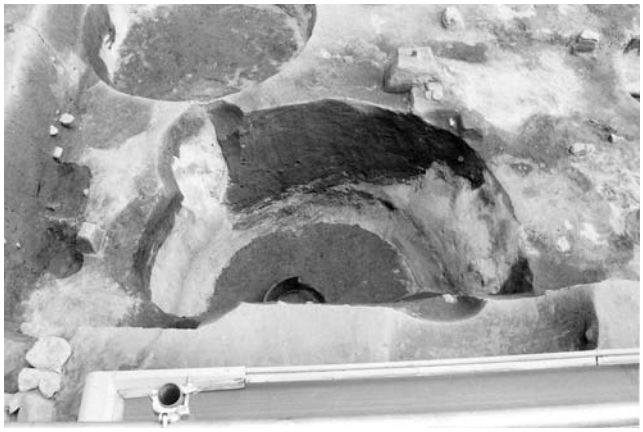
（5）SK-15（東から）

（6）SK-66（南から）

（7）SK-12（北から）

（8）SK-152（北から）

図版 4



（1）SE-99（北から）

（2）SK-23（東から）

（3）SK-95（南から）

（4）SK-100（西から）

（5）SE-285（南から）

（6）SK151土層（西から）

（7）SK-173（南から）

（8）板碑出土状況（東から）

報告書抄録

ふりがな	はかた
書名	博多111
副書名	ー博多遺跡群第152次調査報告ー
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第941集
編著者名	中村啓太郎
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2007年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
博多遺跡群 152次	福岡市博多区 綱場町122	40130	020121	33° 35′ 50″	130° 24′ 30″	20050418 ～ 20050708	256	共同住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群 152次	集落	中～近世	井戸　石組土坑 土坑　柱穴	土師器　肥前系染付 国産陶器　輸入陶磁器 板碑	

博　多　111

ー博多遺跡群第152次調査報告ー

福岡市埋蔵文化財調査報告書第941集

2007年（平成19年）３月31日

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷　有限会社交信社印刷所

福岡市博多区須崎町12番７号